

私の三高体験（03・06・23）

青 山 光 二（昭9・文甲）

ストライキの前

青山光二です。九〇才にもなってまだ小説を書いていて、それで川端康成文学賞を頂いた。何故こんなことが不思議なのかと思うのですけれども、新聞テレビラジオの取材攻めで、この一月程人の来ない日はなく、もうくたくたに疲れております。

私は昭和五年に三高に入りましたが、この年は非常に特殊な年であると思われます。何が特殊かと言いますと、昭和五年に大ストライキがありました。そのストライキの話もいっぱいありますが、先にラグビー部の話をします。三高の校友会である嶽水会にはいろんな部があつて、その一つにラグビー部がありました。三高は慶応の次にラグビーを始めた学校ですから、三高のラグビー部は歴史が古くてなかなか誇り高いのです。英国の皇太子が来日したときも、三高を訪れてラグビー部の連中と言葉をかわしています。その

ラグビー部へ私は同じ一年生の川島春雄君（昭9文丙）とともに引つ張り込まれました。後に私がやめたいと言ったとき、代わりを連れて来いと言われて同級の田鍋健君をひっぱり込みました。この男は本気にやって、のち、ラグビー部のキャプテンになりました。名スリー・クォーターでした。

さて当時、真鍋という京大文学部言語学科の大学院に在籍中でラグビーのスター選手だった人がコーチに來られて「勝つとか負けるとかいうことは考えるな、正しいラグビーをやれ」と言われる。事実、勝つ見込みは全然ないのです。ろくに練習はしないし、だいいち合宿して練習するというものもない、私立大学と戦って勝てるわけがない。コーチは何時も「RUGBY FOOTBALL」という横文字の厚い本を抱えていて、南の運動場の傍のボックス（小屋）でそのレクチュアばかりやるのです。たまにはランニングパスとかやるのですけれども、理屈の方が先です。レクチュアばかりやっていて、ラグビーができるわけがありません。しかしこの真鍋という人は、のちに戦争中、上海の領事館にいて、たくさんの外人をナチの魔手から救ったという凄い人物なのです。

私は京都一中との試合にいっぺん出してもらいましたけれども、どうかすると京都一中の方が強い。こっちにも京都一中を出た人間もいるのですが、京都一中を出たといつてもこれは勉強ばかりしていた人間だからラグビーなんか知らない。理屈は知っているけれど

もルールだけで実際の試合はできない。結局、めったに勝てないラグビー部でした。そんな三高ラグビー部と、正月など、ときたま対戦する慶応大学ラグビー部がベスト・メンバーで颯爽と現れるのには感心しましたね。紳士というべきでした。

三高には運動部単位で琵琶湖周航をする慣例がありました。あれはストライキに入る前で四月から五月にかかる境目ぐらいの時でした。ラグビー部もやっぱりやるということになりまして、ラグビー部の仲間が大津へ行きました。土曜日の午後、一応放課後です。三高水上部のボートはスライディング・シート、八人乗りの長い浅いボートですから、琵琶湖周航なんかできない。同じ大津にある京都一中の艇庫へ行つて、京都一中の旧式の六人乗りのボートを勝手に引つ張り出して、それで沖へ漕ぎ出した。

漕ぎ出したのはいいけれどもすぐに夜になった。真つ暗な湖面は三角波が立って西も東も分からない、これでは下手すると死ぬなと思いました。そうしたら誰かがちゃんと磁石を持って来ていまして近江舞子に着けようと言いだした。何にも見えない真つ暗闇です。水を帽子でかき出す役と漕ぐ役とが交代しながら力漕を続けて、やっと夜明け方に雄松の浜に到着した。旅館がありますからそこで泊まったら、食事にかしわの水炊きが出た。その明るる日はボートをそこへほったらかして、江若鉄道で京都へ帰つて来ました。これがラグビー部の琵琶湖周航でした。琵琶湖周航どころか、近江舞子の雄松まで行つて帰つて

来ただけですが、それを琵琶湖周航と称するのです。というより、それでもやっぱり琵琶湖周航したという感じになるわけです。あのとき下手をすると死んでいたかもしれないと思つとぞつとしますね。事故というのは案外起こらないものです。

大ストライキ

大ストライキといつても、今から考えると牧歌的なストライキでした。そのストライキというものを、私は中学を出たばかりで子供でしたけれども、非常に好奇心の強い人間なものですから、完璧に体験しております。うまい具合にうるさい人の目を逃れて、停学にも退学にもならずにすみましたけれども、始めから仕舞いまで寮に立てこもって一緒にやっていました。日野原重明さんは私の一年上ですが、理科の人はあまりストライキには荷担していませんので、日野原さんも恐らくストライキの仲間ではなかったのではないのでしょうか、確認していませんが。

授業中にも上級生が教室へ入つて来て、教授に「ちよつとお時間をいただきたい」と言う教授はたいてい「さあどうぞ」と言います。三年生の学生が教壇へ上がつてアジ演説をやる。また、全校の各クラスの代表二人ずつを集めて、毎日代表会議が開かれます。各クラスの名簿の一番始めと一番終いの者が代表になる、そういうしくみなので、私のクラ

スは、私と一番終いの和田孟子（昭9文甲）の二人が代表になって、昼休みに合併教室へ行くのです。指導者は段々ストライキを盛り上げようとして、いろいろやっていました。それが読めてくる、分かってくるという程度でしたが、生徒主事の佐藤秀堂とドイツ語教授の平田元吉（モトキチと読む生徒はいなかった）、この二人を辞めさせるといふ議題がメインでした。「秀堂（醜奴）ガン吉、屁でとばせ」というザレ歌までできていた。辞めさせるといふのはおだやかでないのですが、何故辞めさせるかといふことを代表会議の上級生が説明していました。今でも思い出しますけれども、優秀な学生です。

ストライキ前、私たちが入学する前から、教室へ特高の刑事が入って来て、それは平田元吉先生なり佐藤秀堂さんなりの許可を得てですけれども、入って来てごぼう抜きで学生を逮捕してしょつ引いて行く、今考えたらあつてはならないことですから、それが平気で行われていたそうです。学生は純真な心でこんなことはあつてはいけなと思つたのでしよう。私たちにはよくは分かりませんが、代表会議の上級生たちは、猛烈な情熱で反対活動をしたのです。そのとき既にかまっている仲間が沢山いました。特に三高は多かったです。特高に捕まって教室から引き出されて持つて行かれる学生に、平田元吉さんが「君はそのうち退学ということになると思う。こういう時代になつたけれども、君だけを斬るのではない、私もいづれ辞める」と言つた。だから平田元吉に辞めてもらう、

というのが代表会議の意見でした。

平田元吉さんは退学になった生徒に、「眠られない時に読み給え」と言つて自分が訳したヒルテイの著書『眠られぬ夜のために』をくれる、そのためにこの本が平田さんの机の下にいっぱい積んであったというのです。そのことを覚えていたら、だいぶこちになりまして、一高出身の私の畏友、高橋英夫氏が一高の名物教授岩本禎のことを書いた「大いなる暗闇」という著書の中で、岩本が懇意にしていた一高の後輩平田元吉のことを書いていて、たしか金が必要な平田にドイツ語の本を訳す仕事を岩本が与える件りがある。その本がつまりヒルテイの訳であろうと思われます。平田さんがヒルテイを訳して出したけれども一冊も売れないから、のちに処分を受けた学生にそれを播いたということなのでしょう。時間が経つといろんなことが明らかになってきます。

代表会議の要求は

- 1、自由寮の非自由化反対
- 2、代表会議の完全なる自由化
- 3、佐藤生徒主事の辞職要求
- 4、保証教授制度の撤廃

このような要求をするに至った事情について森積氏は次のように述べておられます。
(昭六通信 第3号 昭和52年11月)

「処が昭和四年には生徒主事と言うものが一名増員された。それまで生徒主事と言う制度はあったが、講義を持った教授の兼任制になっていた。増員された主事は講義の時間を持たず、専ら生徒の監督に従事するものであった。この増員された佐藤生徒主事が、それまで総代の下に属していた、事務員の土井と言う人を舎監に任命し、自己の管理下に置き、寮の行政は、総代の手をはなれて、舎監の専制となった。

舎監は、佐藤生徒主事の指令により、寮生の意向を無視して明治以来未だかつて設けられた事のない門限を定め、寄宿舎の通用門であった西門を閉鎖した。

入寮もそれまでは生徒の希望により自由であったが、許可制となり、審査した上でなければ入寮許可しない状態となった」

保証教授というのは、私などの昭和五年入学のクラスから実施された制度で、明らかに思想監察のためと思われる。生徒一人一人に特定の教授が当てがわれて、目を光らせるというセコいことになったわけです。私の保証教授は地理の藤田元春教授でした。

四項目にしぼられて行く要求を議論して、集まっているクラスの代表に「異議ありませんか」と議長は尋ねます。このとき始めて「異議なし」という言葉を覚えました。何でも

「異議なし」と言っておけばいいのだと思っていました。クラス代表がみな「異議なし、異議なし」と言います。「それでは全員一致で意見が固まったから校長のところへ行つて来る」と言つて、議長が何か紙に書いた要求書みたいなものを持って、肩をそびやかして校長室へ行きます。ところが、入つたと思つたら直ぐ回れ右して出て来るのです。校長に会つて話すなんてことはしていません。校長ははね返すに決まつてると言うのです。毎日そういうことが続いて、段々気分が盛り上がり、いよいよ七月二日遂に生徒総会開催という事態になりました。森績氏は「七月二日の暮なづむ新徳館をゆるがせて、九〇〇健児の歌う覚醒の歌は、高く長く響いていた。」(昭六通信 第2号 昭和52年8月)と書いておられます。「覚醒の歌」、それは小野秀雄先輩(明39一文)が軍人教師排斥運動のために、クラスメイトの沢村胡夷作詞に手を入れてつくつた歌だそうです、それを歌いながら引き上げて、みんな寮へなだれこんだ。これがストライキのスタートでした。

寮の入り口で学生が二人、脚立キヤクツの上にあがつて紙袋を持った手を差し上げて叫んでいました。何だろうと思つたら、あんぱんとクリーム・パンを二つずつ入れた袋を積み上げて、入つて来る生徒にそれを一つずつ渡してました。全部寮へこもりですから、そのあんぱんとクリーム・パンがその日の晩ご飯代わりなのです。寮の各部屋にクラスの文三甲一、文三甲二と貼り紙があつて、寮生も皆そこへ入つて泊まつたのです。すでにちゃんと数え

歌ができていて、寮の廊下に、手拍子と一緒に歌声が流れていました。こういう歌です。「一ツとせ、人に知られた三高が、ここに始めたストライキ……」エリート意識まる出しで、聞かれたものではありませんが、こういうものをいったい誰が作るのですかね。

若い者は泊まっても直ぐ寝たりするわけはないので、外へ出て歌を歌ってデモ行進をしたりしました。校内の門の警備を、正門は誰々、西の門はラグビー部、東の門は野球部という具合に割り当てをしてやりました。父兄が自分の息子を引き戻しにやって来るのをいべもなく追い返します。ものすごい勢いでした。京都大学の経済学部長の令息がおりまして、経済学部長がご自分で見えていましたけれども追い返しました。

そうやって二週間ぐらい続いて、その間もいろいろありました。こういうことを毎日やっているとだらけて来ます。私なんか、ラグビー部が西門を押さえていたので、そこから外へ出て、四条の「一力」のところを歩いていたら、林久男先生にばったり出くわしました。林久男先生は文芸部長です。「君は今どうしているんだ」と言われて、「ストライキで寮にこもっていてちょっと抜けて来ました」と答えました。「そうか飯でも食おうか」と花見小路へ入って、その茶屋へ連れて行ってご馳走になりました。ぼくは林久男先生のお気に入りという感じだったかもしれない。しかし、何とかそこを逃げ出さないと、こんなところを見付かったらえらいことになるぞともぞもぞしていた。先生は「ス

トライキなんかやっても、どおせ負けるよ」というようなことを言いながらお酒を飲んでいい機嫌でうつらうつらされている。やっと逃げ出したが、僕が逃げ出したことにも気が付かない様子。

僕は少々悪酔いして、八坂神社の石段のところまでひっくり返って、一時間程寝てしまった。うっかりしたら夜が明ける。帰ってまた西門からもぐりこんだのですが、どこをどうやって学校まで帰ったか覚えがない、そんなこともありました。

七月九日、ストライキが済んで、これは負けるのに決まっていました。この日の状況について、山谷省吾教授は「度々教授会を重ね生徒側と交渉したが、らちがあかず、最後に児玉配属将校の立案により、教授間に部所を定めて、生徒の占領せる寄宿をおそい、ついに彼らの追出しに成功し、ストライキを終わらせたのである。」(『三高同窓会会報』6一九五五年)と書いておられます。時の校長は森外三郎さんで、名校長だと言われるけれども私は名校長とは思いませんね。二六名の除名、一五名の停学。あんなにむごい扱いを学生にはいけません。文部省に媚びているのではないかと、ぼくのような子供でもそう思いました。新徳館でアジ演説をした学生は全部学校を逐われた。そのなかに含まれる大塚喜一郎氏(昭6文甲 非卒業)や後の公安調査庁の初代長官になった川口光太郎氏(昭6文乙)なんかには言わせずと、むろん又聞きですけれども、ちゃんとスパイが入っ

ていますから、活動した学生は皆分かっていのだそうです。

ストライキが終わったとき、東一条の辺りのYMCAで解団式のようなことをやった。

会する者約三十名、「敗れたりといえども……」という心に残る悲壮な調子の演説をした清友英太郎氏（昭5文乙 非卒業）はむろん放校された。最初の新徳館の生徒総会で感動的なアジ演説をした森（谷村）績氏（昭6文乙 非卒業）も放校され、三十年以上も経って会ったときも、ストライキの話になると涙ぐまれた。私は感動しました。

のちに学生側で、退学になった人を何とか救いたいという運動があり、さらに卒業生の運動もあって、退学になった学生が大分また戻って来た。そんな動きがありました。

ストライキ後

そして秋になり、九月、一学期の終わり頃から正常な学校生活が始まったのですが、このとき校内の色が一変しました。目に見えて変わりました。明らかに左翼学生といわれるような人達はいなくなりました。どういうふうに変ったか、私の言葉で言いますと、政治の時代が終わって、学芸の時代が始まったということです。具体的に言いますと、文芸部というのとはもとからあるのですが、映画演劇研究会、ロマンティズム研究会、ゲルマニア協会など学芸関係の研究会がずらりと旗揚げした。今まで考えていたのかなというふ

うな、その人達の存在を知らなかったような人が、みんな頭を上げて動き出した。

文芸部は嶽水会雑誌を年に三回発行していました。野球部は一高戦でかっかしていきでした。中央通路を思い出して頂きたいのですが、校舎をずっと縦に貫いて屋根のついた通路がありました。その真ん中へんに、原稿募集と書いたポストみたいな箱が年に三回掛けられます。始め何のことか分からなかったのですが、原稿をほりこめばいいということらしいので、三〇枚程の小説、小説か何か分からないものですが書きました。

私は神戸二中の出身ですけれど、反動というか何というか、神戸一中と二中は学科だけで娯楽、読書、映画、演劇は一切御法度というようなばかげた学校です。私はそれを真に受けて本を読んではいけないだと思つて、小説なんか読んだことがないので。ですから何も分からない、分からないけれど何か小説というものがあるらしいということだけは分かっていました。小説的衝動みたいなものが私のなかにはありました。原稿用紙に書けということだから、『廻る』という題の三〇枚程の小説か何か知らないけれど、書きたいことを書きたいように書いたものをほうりこんでおきました。二週間程したら一年上の文芸部の理事、西口克巳氏（昭七文乙）がゲラ刷りを持ってやって来て、「このゲラを明後日までに置いて置いてくれないか」と言つて置いて行きました。ゲラ刷りを見せられても、それをどうするのか分からないので、原稿と違つてるところを直せばいいのだろうと思つ

て直して渡しました。それが嶽水会雑誌に載った。これが私の作品が活字になった最初の体験です。

三高は面白い学校で、生徒が嶽水会雑誌に出した作品を先生が授業中に批評したりします。二年生の時のことですが、土井虎賀寿さんなんかはむちゃくちゃで、例えば私の作品を批評したら、後の授業を放棄してしまう。一年のときはそれほどはなかったが、林久男先生あたりが次の小説を書けと急かしたりする。やっぱり学校の雑誌ということでしょうか。

三高文芸部

ストライキの大嵐が吹いた後、昭和六年に織田作之助、白崎礼三、猪木正道らが、昭和七年に野間宏、富士正晴、竹之内静雄らが入ってきました。織田が先頭に立って、東京から小林秀雄さん呼んで講演会をやったり、ずいぶん賑やかだったです。

織田作之助とは僕はその頃から、彼が死ぬまで終生のつき合いで深い仲になりました。それで織田の没後、彼の全集も作りましたし、彼のことを『青春の賭け』という小説にも書いています。彼は学校の近所のバーに好きな女の人が出来たものだからそこへ毎日通って、結局その人と同棲し後に結婚した。学校には殆ど来ないで戯曲を書いていた。あれで

は卒業できるわけがない。

私は二年生になって文芸部の理事になった。同じ二年生の田宮虎彦は詩を書き、森本薫は「ダムで」という達者な一幕物の処女作を書いて、いずれも私が嶽水会雑誌に載せた。

三年生になってからのことだが、新入生の野間宏の最初の原稿が入ってきた。三〇枚くらいのもので僕が読んでいいとも悪いとも思わないが、何か新しいものがあるのでとにかく載せようと思った。ところが織田が反対して、これは日本語になっていないということでも没にしようと言う。しかし、ぼくの方が先輩ですから、織田をだまらせて無理矢理に載せました。野間や富士の一派は織田や白峰や私の仲間とは始めから仲が悪く、嶽水会雑誌の合評会を鎗屋かきでやっていたら、伊吹武彦先生が仲裁しなければならぬような喧嘩になった。野間宏はその頃は左翼でも何でもない当たり前の文学青年で、京都大学へ入ってから左翼になったのです。独特の才能は感じないが、何とか梶子でも後へ引かない、一生こういうものを書いていくのだろうといった感じの物書きでした。

ストライキが済んで何か校内の空気が変わって来て、私なんかもそれから文学書のようなものを読むようになった。如何に読んでいない本が多いか、中学のときにこんな本は読んでいなければいけないのに、学校が邪魔して読ませなかった。案外織田なんかは読んでいた。今からでは手後れだというぐらいに読みたい本が山のように出て来て、このまあい

つたらおくれてしまふ、どうしたらいいだろうと思つたのです。その頃、校医が昼休みに北寮の二階に来てちよつとした診察もしてくれる。この方は私の恩人ですから名前も忘れません。瀧野増市（大14理乙）という方で京都大学医学部の副手をしておられた。そこへ行つてちよつと身体の具合が悪いと言つたら診察して、大したことはないけれども、ところで、君は何になりたいのだと聞かれた。小説家か映画監督かできたらそういうものになりたいと答えたら、そんな本を読まなければだめではないか、本を読んでいるか、本を読んでいる間がないのなら学校を休んだらどうだと言う。どうやって休むのですか、僕が診断書を書いてやる、「一年間休学を要す」という診断書を書いてやるから、それを学務課へ持つて行き給え、そうしたら一年間休めるとの答え。こんな結構な話はない、瀧野さんの診断書を学校へ出して一年間休学しました。そのとき僕は三年になつていましたが、一年間休んで、とにかくトルストイ全集とチエホフ全集を読もうと思ひました。（実際は半分も読めなかつた。）

学校の方では英語の主任教授の安藤勝一郎先生が、シェークスピアの「CORIOLANUS」のテキスト購読をやっておられた。あれだけは聴かなければと思つて、もぐりて教室に入って聴きました。講義は週に二・三回あり、それを一時間だけ聞いて帰つてくるといふようなことをやっていました。それが安藤先生の目にとまつて、のちに大学を

出てから、本来なら不可能な怠け者学生の中等教員への就職が、すらすらと可能になったという、安藤先生の恩恵としか受け取れない経緯がありました。

ちよつと説明しますと、当時、文甲、理甲の卒業者に限って、三年間を通して英語の点数が八五点以上だったら、手数料のよくなものを十五円払うと、卒業後（大学を出ても出なくても）中等学校の英語教員の資格が与えられるという特典があつたのです。英語といっても、安藤教授だけではなく五人くらいの教授に英語をたたきこまれるのです。そのすべてが八五点以上というのだから容易なことではない。ところが私は全部八五点以上ということで、現実に教員免状を手にして、東大卒業後、商業学校の教師になりました。勅任官の安藤先生が何やら細工を加えて下さったとしか、今も私には考えられないのです。

私は文甲ですけれども文乙というクラスがあります。私と同じ昭和九年卒の文乙には猪木正道、柴野方彦、日下部喜代治らが揃っていました。斉藤ナニガシという秀才、三高文乙を出て京都大学医学部へ入って、医学の方で何か大きな仕事をした人です。この学年の文乙は秀才揃いでした。そのクラスへ来られたのが、山口高等学校から三高へ栄転になつたドイツ語の教授です。三高の先輩ではない。文乙の連中はこれがまず気に入らない。始めからこの教授を追い出すつもりで一生懸命勉強するわけです。文乙でドイツ語の下地があるこの連中がみんなであらを探すつもりで勉強するのですから、先生の方はたまつたも

のではない。質問攻めにして立ち往生させる、それを毎時間やった。それでとうとうその先生は、このクラスが卒業するまで休講にしろらうということで、結局辞められた。文乙はそういういたずらをする勇ましいクラスでしたが、文甲にはそういうことをする元気のいい連中にはいませんでした。

ストライキ再説

僕らの年代の三高の生活は昭和五年のストライキと切っても切れないのです。戦後になって、あれをもっとはつきりさせようというので、西海太郎（昭6文甲）、北條元一（昭7文乙）、宇高基輔（昭8文甲）、小生、その他が中心になって「三高ペンの会」というのを作って、自分が知っている情報を交換しようというので、そのことを中心にテープに録音したりしました。そのテープを僕が持っているのとみなが言うのですけれど、どこへ行ったかわからない。

ちらほら断片的に覚えている話、みんなも思い出すのを、その都度書き加えていったのです。こんな話がある。左翼の学生が下宿を変わります。理想的な下宿が一つあって、そこへ左翼の学生が交代で入る。何が理想的なのだったら、おばあさんと奥さんとの所帯で、普通の家だとガリ版を刷るのにガリガリやるとすぐわかってしまう。ところが、お

ばあさんは耳が聞こえない、奥さんの方は目が悪い、だからその家は、ガリ版でルポを作るのに理想的というわけで、代々左翼の人に使われたという話が出て来たりしまして京都らしい話です。ストライキの前か後か、大宅壮一氏が三高は左翼の温床おんどだなんて言っていたという話があるが、後になって驚くような左翼学生の列伝みたいなものがあります。岩波新書で『紅萌ゆる』を出した土屋祝郎氏（昭7文甲 非卒業）も筋金入りの左翼といえるでしょうが、ストライキ前後に学校を追われています。『紅萌ゆる』は事実関係に間違いの多い困った作品ですが、妙に魅力があります。私の心にくつきりと残っているストライキ関連の上級生、それは先に述べた森績さんと清友氏、このお二人です。

竹村哀れ

ここでちょっとなつかしいことを一つ語っておきたいのです。近衛通りというのがあります。あそこに喫茶店ができて「サロンえさき絵岬」という看板がかかっていた。小さい店で、男の子を連れた中年の若い女性がやっていた。そこへ僕と僕のクラスの竹村和夫（昭10文甲）と櫻井福美（昭8文甲）これは後に東京地検の検事になった、と三人が毎日入り浸って、そこから学校へ行ったり帰ったりしていたのです。この男の子が後の江崎玲於奈さん（昭19理乙）です。江崎玲於奈のお父さんは三高の理科の先輩で大阪におられた。僕

はてつきり別居したのだろう、別れたのだろうと思つていたのですけれども、後に弟ができたしてややこしい。

「サロンえさき絵岬」の客は京大の学生が主で、三高生もチラホラ。竹村は高知県土佐出身の気の荒い男で、これがこのマダムに惚れてしまつてどうしようもない。そのうちマダムが店をやめて、下鴨の方へ引つ越すということになり、私ら三人の三高生は大八車を持つて来て、それを引つ張つて引つ越を手伝つた。そのときにマダムの日記帳を竹村が持つて行つた。それでマダムは怒つて竹村を出入り差し止めにした。この話はまだ先が長いので、いちおうここまでにしますが、洋画家であつた江崎二世子さん（玲於奈氏の母）は先年亡くなりました。

竹村は教室では廊下際に座つていまして、廊下との境の硝子窓に白い木綿のカーテンが掛かつていました。そのカーテンをナイフで切つて靴下にするのです。ハンカチにするくらいならまだいいけれど、その何倍かの大きさに切つて足を突つ込むとちようど靴下になります。段々廊下のカーテンが小さくなつてしまふ。すると小使いさんが来て新しいのに取り換えるわけです。そういう男なのです。

僕がなんかで休んでいたとき、先生が出席をとつて「青山君」と言うと、いないから返事がありません。すると竹村が立つて何か言うのですがそれが先生に分からない。それを

別の友達が訊して、青山君は風邪ひいて休んでいるそうですと言う。ああそうか、じゃあ竹村は何と言ってるのだとその先生が聞き返された。「ふう、じゃ、でございます」と言っておるのですと答えた。「かぜ」で休んでおりますというところを、「ふうじゃ」なんて今時使わない言葉をこの男は使う、後に無事に卒業して東大の経済学部へ入りました。

吉村又三郎（昭8文甲）、これは外交官でアルゼンチンの公使になったりしましたけれど、この男と一緒に銀座の吉村の行きつけのバーへ行つた。これはやややこしい話なので、けれど、その店で吉村が僕に言うのです。竹村がこの店のある女性に惚れた。

その女の人は吉村が契約して恋愛関係を結んでいた女性だと、竹村は言うのです。恋愛関係を契約するという、ああいうことが法学部の学生のあいだでは珍しくなかつたらしい。僕は気に入りませんねえ。吉村が外務省へ入省してロンドンへ赴任するという間際にそのことは起こつた。他のひとに言わせると、吉村が自分の女を竹村に譲つて行つたのだということになる。吉村はそうは言わない。竹村を連れて行つたら勝手に惚れたのだ。ああいうとき音がするねん、どんな音がするねんと僕。それが言うにいえん音やね。確かにそのとき、その音がした、と。

それで、その後どうなつたかといいますと、竹村は情熱家ですからその女の人を口説きおとして、同棲を始めた。その女の人は肺病で大分悪いのです。今と違って当時はアルバ

イトがない。彼はビルの建設現場へ行つて親方に頼んで仕事をもらった。女の人に栄養価の高いものを食べさせるために一生懸命働いた。働きすぎて体をこわして肺病になり、短い間に体がめちやくちやになつて死んでしまった。その女のひとも死んだのです。哀れな話なのです。僕は竹村のことを考え出すと、可哀想で可哀想でしようがない。当時でも、家庭教師で結構かせぐ人もあつたのですが、高知県の方言で家庭教師をやつても中学生には分からない。だから家庭教師も殆ど務まらない。学生アルバイトがないあの時代だからあのようなことが起こつた。アルバイト悲話みたいなものです。

『われらが風狂の師』補遺

土井虎先生について質問がありました。あの人の話は『われらが風狂の師 上下』（新潮社刊）に詳しく書きましたからあれ以外に取り立てて申し上げることはありません。あの作品は北山茂夫さん（昭6文甲）が、二人で京都の町をタクシーで走りながら、小説の取材つて面白いね、手伝うよと言つて、随分取材を手伝つてくれました。その北山さんが書き下ろしの『万葉集とその世紀 上中下』全巻の一番最後の原稿を書き上げて、新潮社の編集者が受け取りに来るといふ日に、机の前で倒れていて、そのまま亡くなられた。SCRIBENS EST MORTUUS 書きながら死ぬ、といふのは北山さんのことです。奥さん

は私がうつかりしていたからと自分を責められるけれども、何も奥さんから言われて仕事を止める人ではないし、奥さんのせいであるわけではない。マルクス主義の歴史学者の典型みたいな人で、この人も土井さんがかかわった人です。土井さんはやっぱり沢山の学者を育てたというか関連を持たれた。

私のところへお見えになりました置いて行かれた土井さんの不思議な絵が何枚かあるのです。額に入れて飾ってありますが、ああいう狂った人の絵というのは分からないのですけれども、その絵が年を経るごとに良くなってくるのです。不思議ですね。その一つにパリのノートルダムだと言われるのがあります。土井さんはノートルダムへ行ったことはいはずなんだけど、本人がそう言われるのだから、そうかもしれない。絵の上には「Meinen Verehrten Freund Aoyama」(親愛なる友青山君)、下に「one hundred dollars」と書いて、そしてトラとラテン語で署名してある。これは one hundred dollar の借金の証文、というよりも、金を寄せせよということなのです。それを黙って置くわけですからおわかりかな。

唐突ながらこの辺で終わらせていただきます。ご静聴有難うございました。

(作家)